

# On the Personality of *Sima Yi* from 228 to 232 Based upon a Critical Study of “*Jin shu*” *Xuandiji*, “*Sanguozhi*” and Pei Songzhi “*Sanguozhi Zhu*”

Takashi Mitsuda

It seems that some parts of the compilations of “*Jin shu*” *Xuandiji* 『晉書』 宣帝紀 from 228 to 232 were based on “*Han Jin Chunqiu*” 『漢晉春秋』 and *Wang Chen* “*Wei Shu*” 王沈 『魏書』, but the other parts of “*Jin shu*” *Xuandiji* have differing contents from “*Sanguozhi*” 『三國志』 and Pei Songzhi “*Sanguozhi Zhu*” 裴松之 『三國志』 注 that seems to hide the defeats and failures of *Sima Yi* 司馬懿.

Considering the relationship between *Sima Shi* 司馬師 and the *Fuhua* 浮華 group and *Xiahou Xuan* 夏侯玄, the case could be made that *Sima Yi* allied himself with the Imperial family of the *Cao Wei* 曹魏 and the noble families through marriage as a means of survival in the struggle for political power rather than as an attempt to strategically expand his family.

The causes of the rise of *Sima Yi*'s political status were due to a shortage of human resources of successors to *Cao Wei* with the early passing of *Cao Xiu* 曹休 and then soon after *Cao Zhen* 曹真 and the expulsion of the *Fuhua* group.

# 曹魏・太和2年～6年の司馬懿像に関する 史料批判的研究

— 『晉書』卷一宣帝紀と『三國志』及び裴松之注を中心として —

満 田 剛

## はじめに

曹魏の太和2年・蜀漢の建興6年（西暦228年）、蜀漢の諸葛亮の第一次北伐が始まる直前に司馬懿が孟達を討伐し、諸葛亮の北伐の出鼻を挫いた。

その後の司馬懿の動向について、これまでの先行研究では明帝期の軍事行動と政治史の流れが別々に述べられることが多く、司馬懿に関する様々な政治的事象のその時点での意義に関する考察を尽くし切れていないようにも思われる。また、陳壽『三國志』及び裴松之『三國志』注と『晉書』卷一宣帝紀（以下、『三國志』・『晉書』の巻数は略す）では記述の相違が多いことに注意が必要である。

そこで本論文では、曹魏を中心とする政治史を踏まえながら、司馬懿の政治的動向を年代記として網羅的に整理し直し、孟達を撃破した後の太和2年（西暦228年）から太和6年（232年）頃までの司馬懿に関して、主として『晉書』宣帝紀（以下、「宣帝紀」と略す）と陳壽『三國志』及び裴注所引史籍などとの記述を比較し、史料批判的研究を行ってそれらの史書の傾向を分析しつつ、場合によっては司馬懿に関係する「宣帝紀」に存在しない事象なども取り上げて、各史書における司馬懿像に関する考察・分析も進めたいと考えている。

## 太和2年～6年の司馬懿の動向

### 1：孟達討伐の援護処理と司馬懿の征呉計画（太和2年～3年）

司馬懿が孟達を討伐した後の司馬懿について、「宣帝紀」には

初，申儀久在魏興，專威疆場，輒承制刻印，多所假授。達既誅，有自疑心。時諸郡守以帝新克捷，奉禮求賀，皆聽之。帝使人諷儀，儀至，問承制狀，執之，歸于京師。又徙孟達餘衆七千餘家於幽州。蜀將姚靜、鄭他等帥其屬七千餘人來降。

時邊郡新附，多無戶名，魏朝欲加隱實。屬帝朝於京師，天子訪之於帝。帝對曰：「賊以密網束下，故下棄之。宜弘以大綱，則自然安樂。」又問二虜宜討，何者爲先？對曰：「呉以中國不習水戰，故敢散居東關。凡攻敵，必扼其喉而搃其心。夏口、東關，賊之心喉。若爲陸軍以向皖城，引權東下，爲水戰軍向夏口，乘其虛而擊之，此神兵從天而墮，破之必矣。」天子並然之，復命帝屯於宛。

とあり、孟達の余衆を幽州に移した件や蜀漢の將の姚靜・鄭他については、少なくとも正史ではここにしか記載がなく、ひとまずこの通りに受け取っておくこととする。

その後、司馬懿が京師に戻った際に、明帝が司馬懿に孫呉と蜀漢のどちらを先に討伐すべきかと尋ねた。それに対して司馬懿は、蜀漢より孫呉が強く、より脅威であるという認識のもとに、孫呉を先に討つべきだとして、孫呉が自らの水軍の強さと曹魏の水軍の不慣れさを持ち、当時の都の武昌の近辺の兵力を分散していたことから、当時の孫呉の首都である武昌に近い夏口と東関が呉の「心喉」であり、歩兵・騎兵を廬江地区から南下させて陽動として皖城に向け、孫権を引きつけた後、主力である水軍を夏口に向けて虚に乗じて撃てば、これを破ることは必定であるとする二方面作戦を述べ、明帝もそれを受けて司馬懿を宛に再び駐屯させている<sup>1)</sup>。

このような記事は『三國志』をはじめとする「宣帝紀」以外の史書には見えず、加えて後述するように実際には採用されなかったことから扱いに注意も必

要であるが、この進言はひとまず司馬懿独自のものと考えておくこととする。以上の記述を踏まえると、この頃の司馬懿は蜀漢に備えつつ、呉を主な仮想敵として準備していたということになるだろう。

そして、この直後、曹魏は孫呉征伐を開始し、曹休が皖を、賈逵・滿寵・胡質らが東関を、司馬懿が江陵を攻撃した。孫呉の周魴の降伏を信じた曹休が敵地に深く侵入し、詔により司馬懿は進軍を止め、賈逵らは曹休と合流することとなった。しかし、曹休は周魴に騙されており、陸遜らと石亭で戦って敗れ、賈逵に救われて何とか帰還した曹休は明帝から慰労されたものの、背に癰を発して急死したとされる<sup>2)</sup>。

ここまでの戦いの経緯を先述の司馬懿の献策と比較してみると、司馬懿が荊州から夏口を狙う水軍を主力とし、皖を目指す陸軍を陽動とした二方面作戦を進言したにも関わらず、用いられたのは上記の三方面作戦であり、司馬懿の献策は採用されていないことがわかる。さらに、司馬懿は詔により途中で軍を駐留することになったことも含め、明確に大司馬・曹休が中心となった軍事行動であり、このようなところにも宗室優先の人事の影響が及んでいると思われる<sup>3)</sup>。

「宣帝紀」にはこの石亭での戦いに関する記述がない上に、他の史書でもこの戦いで司馬懿の進言なども残されておらず、賞罰に関する記載もないことから、この敗北が司馬懿の政治的立場に大きな影響を及ぼすことはなかったと考えられる。と同時に、宗室優先の方針に基づく明帝の政権において、司馬懿は重臣の一人ではあるものの、あくまでも官僚の一人であり、宗室の補佐的な立ち位置にあって、彼の進言が最重要視されていないことも浮き彫りになっている<sup>4)</sup>。

## 2：司馬懿の大將軍就任と曹眞の蜀漢遠征（太和4年）

さらに「宣帝紀」には

四年，遷大將軍，加大都督，假黃鉞，與曹眞伐蜀。帝自西城斫山開道，水陸並進，泝沔而上，至於胸臆，拔其新豐縣。軍次丹口，遇雨，班師。

とあり、太和2年の曹休の没後、太和4年に（太和元年以降の諸葛亮の北伐を結果的に撃退してきた）司馬懿が大將軍となったことが記される。『魏志』明帝紀では  
太和……四年二月……癸巳，以大將軍曹眞爲大司馬，驃騎將軍司馬宣王爲大將軍，遼東太守公孫淵爲車騎將軍。

とあるように、司馬懿の大將軍就任と同時に曹眞が大司馬となっている。これについては西方防衛を担当していた曹眞による大月氏国の朝貢への功績によるものとの指摘もあるが、明帝及びその周辺から警戒され、政權中枢から外されたと見ることもできる司馬懿が大將軍に昇格したことに加え、曹眞が曲がりなりにも諸葛亮の北伐を防いできたことも踏まえると、諸葛亮の北伐が一息ついたところでの曹休没後の序列昇格人事だったと見るべきであろう<sup>5)</sup>。

この直前の太和4年2月、明帝は「浮華」<sup>6)</sup>の徒を抑圧して儒学を重視する詔を発している<sup>7)</sup>が、これについては後述する。

また、これも司馬懿の大將軍就任直前のことと思われるが、『三國志』魏書〔以下、『魏志』と略す〕王粲傳附吳質傳裴注所引『吳質別傳』に

太和四年，入爲侍中。時司空陳羣錄尚書事，帝初親萬機，質以輔弼大臣，安危之本，對帝盛稱「驃騎將軍司馬懿，忠智至公，社稷之臣也。陳羣從容之士，非國相之才，處重任而不親事。」帝甚納之。明日，有切詔以督責羣，而天下以司空不如長文，即羣，言無實也。質其年夏卒。

とあり、曹丕の「太子四友」として司馬懿や陳羣とともに文帝（曹丕）を支えていた吳質が司馬懿を称賛して陳羣を攻撃しており、これによれば、司馬懿と吳質の関係はこの頃でも良好であったと思われる。このような動きについても後述したい。

同太和4年、大司馬となった曹眞は蜀漢への遠征を実行する。『魏志』明帝紀には

太和……四年……六月……丙申，省上庸郡。秋七月……詔大司馬曹眞、大將軍司馬宣王伐蜀。……九月，大雨，伊、洛、河、漢水溢，詔眞等班師。

とあり、『魏志』曹眞傳には

（太和）四年，朝洛陽，遷大司馬，賜劍履上殿，入朝不趨。眞以「蜀連出侵

邊境，宜遂伐之。數道並入，可大克也」。帝從其計。眞當發西討，帝親臨送。眞以八月發長安，從子午道南入。司馬宣王泝漢水，當會南鄭。諸軍或從斜谷道，或從武威入。會大霖雨三十餘日，或棧道斷絕，詔眞還軍。

とある（波線部は「宣帝紀」と同字、二重線部は同内容のものを示す）。

（『魏志』曹眞傳によれば8月に）長安を出発して子午谷から漢中へ出撃し、司馬懿も宛を出発して西城より陸路を開いて進軍しつつ、沔水（漢水）を溯って漢中を目指したが、長雨のために撤退している。曹眞が通ってきた子午道は、魏延が諸葛亮に進言した内容から予測されるルート<sup>8)</sup>と全く同じルートを逆に通ってきたことになる。

この際、華歆や王肅が反対している<sup>9)</sup>が、司馬懿はあくまでも曹眞の指揮に従って行動しているのみで、この遠征での進言や遠征自体に関する司馬懿本人の意思を示す史料は存在しない。

また、司馬懿が参加し、撤退に追い込まれた宗室の人物中心の遠征に関連して、「宣帝紀」では曹眞を中心とする蜀漢征伐については記載があるにも関わらず、先述の曹休を中心とする孫呉征伐に関する記載がない。その理由としては、大雨という不可抗力で撤退した蜀漢征伐と実際の戦場で大敗して撤退した孫呉征伐という違いに加えて、蜀漢遠征での司馬懿は実際に戦場まで到達し、新豊県を落とすなどの一定の戦果を挙げているが、孫呉征伐ではほとんど何もしていないことが考えられる。

### 3：蜀漢・諸葛亮の北伐への対応（太和5年）

太和5年（231年）（『蜀志』後主傳では建興9年2月、『魏志』明帝紀では3月）、司馬懿がはじめて諸葛亮の北伐に相對することになる。「宣帝紀」では

明年，諸葛亮寇天水，圍將軍賈嗣、魏平於祁山。天子曰：「西方有事，非君莫可付者。」乃使帝西屯長安，都督雍、梁二州諸軍事，統車騎將軍張郃、後將軍費曜、征蜀護軍戴凌、雍州刺史郭淮等討亮。張郃勸帝分軍住雍，郃爲後鎮，帝曰：「料前軍獨能當之者，將軍言是也。若不能當，而分爲前後，此楚之三軍所以爲黥布禽也。」遂進軍隴壩。亮聞大軍且至，乃自帥衆將芴

上邽之麥。諸將皆懼，帝曰：「亮慮多決少，必安營自固，然後芟麥，吾得二日兼行足矣。」於是卷甲晨夜赴之，亮望塵而遁。帝曰：「吾倍道疲勞，此曉兵者之所貪也。亮不敢據渭水，此易與耳。」進次漢陽，與亮相遇，帝列陣以待之。使將牛金輕騎餌之，兵才接而亮退，追至祁山。亮屯鹵城，據南北二山，斷水爲重圍。帝攻拔其圍，亮宵遁，追擊破之，俘斬萬計。天子使使者勞軍，增封邑。

とあるが、『三國志』蜀書〔以下、『蜀志』と略す〕諸葛亮傳裴松之注〔以下、「裴注」と略す〕所引『漢晉春秋』には

亮圍祁山，招鮮卑軻比能，比能等至故北地石城以應亮。於是魏大司馬曹眞有疾，司馬宣王自荊州入朝，魏明帝曰：「西方事重，非君莫可付者。」乃使西屯長安，督張郃、費曜、戴陵、郭淮等。宣王使曜、陵留精兵四千守上邽，餘衆悉出，西救祁山。郃欲分兵駐雍、郿，宣王曰：「料前軍能獨當之者，將軍言是也；若不能當而分爲前後，此楚之三軍所以爲黥布禽也。」遂進。亮分兵留攻，自逆宣王于上邽。郭淮、費曜等徼亮，亮破之，因大芟刈其麥，與宣王遇于上邽之東，斂兵依險，軍不得交，亮引而還。宣王尋亮至于鹵城。張郃曰：「彼遠來逆我，請戰不得，謂我利在不戰，欲以長計制之也。且祁山知大軍以在近，人情自固，可止屯於此，分爲奇兵，示出其後，不宜進前而不敢偏，坐失民望也。今亮縣軍食少，亦行去矣。」宣王不從，故尋亮。既至，又登山掘營，不肯戰。賈栩、魏平數請戰，因曰：「公畏蜀如虎，奈天下笑何！」宣王病之。諸將咸請戰。五月辛巳，乃使張郃攻無當監何平於南圍，自案中道向亮。亮使魏延、高翔、吳班赴拒，大破之，獲甲首三千級，玄鎧五千領，角弩三千一百張，宣王還保營。

とあって、出陣から張郃に対する司馬懿の発言まではほぼ同文であり<sup>10)</sup>、現行の「宣帝紀」のこの部分が『漢晉春秋』、もしくは『漢晉春秋』と同じ史書を典拠にしていたと考えられるが、上邽の麦をめぐる攻防から記述に違いが見られるようになる。

経緯をまとめると、諸葛亮が鮮卑の軻比能を招き寄せ、軻比能は北地郡石城県まで進出して諸葛亮に呼応しており、さらに病に倒れた大司馬・曹眞が太和

5年3月に没するという状況下で、司馬懿は明帝から「西方のことは重要で、君に付する以外にない」とされて長安に赴き、諸葛亮率いる蜀漢軍を迎え撃ち、司馬懿は費曜・戴陵（戴凌）らに精銳四千を与えて上邽を守らせ、その他の総勢をくり出して司馬懿は祁山の救援に向かった。張郃は軍勢を分けて雍・郿に駐屯させようとしたが、司馬懿は「前軍独りで敵に対抗することができるなら將軍の言は正しいが、対抗できず前後に分断された場合、楚の三軍が黥布に敗れたのと同じことになる」として採用しなかった。諸葛亮は兵を駐留軍と攻撃軍に分け、自らは司馬懿を待ち受けるため上邽に向かって郭淮・費曜らを撃破し、その地の麦を刈り取ると、司馬懿と上邽の東で遭遇したが、司馬懿は要害にたてこもったため、諸葛亮はひきあげた。司馬懿は諸葛亮の後を追って鹵城まで来たところで張郃は「敵は長期間の計画を立て制圧するつもりになっており、そのうえ、わが大軍が接近していることを知れば、人々の気持は自然に団結するでしょう。兵を分けて奇襲部隊を編成し、敵の背後を突く態勢を示しましょう。諸葛亮の遠征軍は食糧が乏しいですから、放置しておいても立ち去るでありましょう」と進言したが、司馬懿は採用せず諸葛亮の後を追ひ、布陣すると壕を掘って戦おうとしなかった。賈栩・魏平などの諸将が戦うことを望んだので、張郃に祁山の南に陣取る何平（王平？）<sup>11)</sup>を攻撃させ、司馬懿は正面から諸葛亮と戦ったが、蜀漢軍の大勝利に終わり、司馬懿は陣にこもってしまった。しかし、兵糧補給が続かないとして李平（李嚴が230年に改名）は諸葛亮に帰還を要請したため、8月、諸葛亮は退却を開始し、追撃しようとした張郃を木門で戦死させた<sup>12)</sup>。

「宣帝紀」では、諸葛亮が上邽の麦を刈り取ろうとしていたことを諸将が懼れると、司馬懿が諸葛亮の決断力のなさを見抜き、軍を進めると、諸葛亮はその様子を見て遁れ、司馬懿がさらに漢陽に進軍し、牛金に輕騎を率いさせて諸葛亮の軍を誘うと、軍同士が接したばかりで諸葛亮が退き、祁山に至ったことになっていて、諸葛亮が上邽の麦を刈り取っていないように読める。これについて、『魏志』明帝紀裴注所引『魏書』には

魏書曰：初，亮出，議者以爲亮軍無輜重，糧必不繼，不擊自破，無爲勞



兵；或欲自芟上邽左右生麥以奪賊食，帝皆不從。前後遣兵增宣王軍，又敕使護麥。宣王與亮相持，賴得此麥以爲軍糧。

とあり、明帝が司馬懿軍の兵を増強して麦を監視させ、その麦を軍糧にしようとしていたとされる<sup>13)</sup>ことや、『魏志』本文にもこの戦いでの上邽の麦に関する記述がないことから、上邽の麦に関する「宣帝紀」と『魏志』及び同明帝紀裴注所引『魏書』の記述が共通しており、これらの史書は典拠とされた史書・史料が同じものである可能性が高い。『魏志』の主要な典拠の一つが王沈『魏書』であると考えられることや、『晉書』が編纂された唐代まで王沈『魏書』が残っていたと考えられており、現行『晉書』、もしくはその典拠となつたいわゆる「十八家晉書」<sup>14)</sup>が参照した可能性があることから、この内容については王沈『魏書』、もしくは王沈『魏書』を典拠とした史書が参照されたものと考えられる。

それに対して、『蜀志』諸葛亮傳裴注所引『漢晉春秋』を確認すると、まず上邽の麦を諸葛亮に刈り取られた後で上邽に到着した司馬懿が險に依つたため、諸葛亮は戦うことができず引き上げたと記されていて、「宣帝紀」や『魏志』明帝紀裴注所引『魏書』とは異なっている。

『魏志』郭淮傳本文には

五年，蜀出鹵城。是時，隴右無穀，議欲關中大運，淮以威恩撫循羌、胡，家使出穀，平其輸調，軍食用足，轉揚武將軍。

とあり、この戦いの際に、郭淮は兵糧を確保するために羌や胡を手なづけ、彼らから供出させていたことがわかる。加えて、『華陽國志』卷七劉後主志には  
九年春，丞相亮復出圍祁山。始以木牛運。參軍王平守南圍。司馬宣王拒亮，張郃拒平。亮慮糧運不繼，設三策。告都護李平曰：「上計斷其後道。中計與之持久。下計還住黃土。時宣王等糧亦盡，盛夏雨水。平恐漕運不給，書白亮宜振旅。夏六月，亮承平指引退。張郃至青封交戰，爲亮所殺。」  
とあり、諸葛亮が兵糧運送で苦しんでいるときに、司馬懿の兵糧も尽きたことになる。これらの記述を踏まえると、諸葛亮の北伐当時、魏も蜀漢と同様にかなり兵糧に苦しんでおり、『魏志』明帝紀裴注所引『魏書』にあるように上邽

の麦を確保して軍糧の頼みとするだけでは（少なくとも）足りなかったことは確実であり<sup>15)</sup>、実際には上邽の麦を諸葛亮に刈り取られていたと見るのが妥当であろう。

また、『蜀志』諸葛亮傳裴注所引『漢晉春秋』ではこの時に諸葛亮が鮮卑の軻比能を招き寄せ、軻比能は北地郡石城県まで進出して諸葛亮に呼応していたことも記されているが、「宣帝紀」にはその記載がない。

さらに、その後の司馬懿による諸葛亮の追撃自体は共通しているものの、『蜀志』諸葛亮傳裴注所引『漢晉春秋』ではその前に張郃が諸葛亮軍は遠征してきており、戦わないことが魏の利益であることとみて、長期戦で制するつもりでいること、大軍で近づけば諸葛亮軍が団結するであろうこと、敵に圧力をかけられず、民衆の期待を失うのもよくないので、ここに駐屯した上で兵を分け、奇兵で背後をつけば、兵糧が少ない諸葛亮軍は撤退するであろうことを進言したにも関わらず、司馬懿がそれを押し切って進撃し、山上に布陣して戦おうとしなかったため、賈栩・魏平が戦鬪を請い、「公は蜀を虎の如く恐れており、天下の笑いものになる」と言われたことを気に病んでいたとされているが、「宣帝紀」では司馬懿が攻めようとするに諸葛亮が撤退したことにされており、戦いの経過に関する記載が全く異なっている。

祁山（鹵城）での戦いについても、「宣帝紀」では諸葛亮が南北二山に依り、川の水を断ち切って重囲としたが、司馬懿がその囲みを抜いて破ったことにされているが、『蜀志』諸葛亮傳裴注所引『漢晉春秋』では攻めかかった司馬懿が諸葛亮軍に敗れ、司馬懿は帰還して陣営を守ったとされており、記述が全くと言ってよいほど異なっている<sup>16)</sup>。

『漢晉春秋』は後漢から蜀漢に受け継がれた正統性を司馬昭の蜀漢征服によって興った晋が受け継いだとの歴史観を有する史書であり、司馬懿をはじめとする司馬氏を賛美するとともに曹魏宗室を批判し、蜀漢をも賛美する性格を有する<sup>17)</sup>とされるが、「宣帝紀」と比較しながら『蜀志』諸葛亮傳裴注所引『漢晉春秋』を見ると、蜀漢、ひいては諸葛亮を司馬懿よりも高く評価して記述していることが改めて確認できる<sup>18)</sup>。

#### 4：次なる諸葛亮の北伐への準備（太和5年頃）

その後の「宣帝紀」では

時軍師杜襲、督軍薛悌皆言明年麥熟，亮必爲寇，隴右無穀，宜及冬豫運。帝曰：「亮再出祁山，一攻陳倉，挫衄而反。縱其後出，不復攻城，當求野戰，必在隴東，不在西也。亮每以糧少爲恨，歸必積穀，以吾料之，非三稔不能動矣。」於是表徙冀州農夫佃上邽，興京兆、天水、南安監冶。

とあり、杜襲や薛悌の「明年に麦が熟し、諸葛亮が必ず出撃してくるのに、隴右には穀物がないので、冬に運搬してくるべきだ」との発言に対して、司馬懿が「諸葛亮はたびたび祁山に出て、一度は陳倉を攻めてきたが、挫折して戻った。その後で出撃する際には城攻めはせず、野戦を求めるであろうし、それは隴東であって、西ではない。諸葛亮は毎回兵糧が少ないのを恨んでいることから、戻って必ず穀物を蓄積するであろうから、三年は動かないと見ている」と述べ、上表して冀州の農夫を上邽に入植させ、京兆・天水・南安の塩池を興したとされる。

『三國志』及び裴注において、「宣帝紀」にあるような杜襲や薛悌の発言、そして彼らに対する司馬懿の反論は存在せず、史料批判が難しく、ひとまずは受け入れざるを得ない。ただ、この司馬懿の発言が史実から遡って作り出したものである可能性も考慮しておかなければならないだろう。

冀州の農夫を上邽に移した件と京兆・天水・南安の塩池の件については、『晉書』食貨志にも

嘉平（「太和」の誤り<sup>19)</sup>）四年，關中饑，宣帝表徙冀州農夫五千人佃上邽，興京兆、天水、南安鹽池，以益軍實。

とあり（波線部は「宣帝紀」との共通部分）、太和4年の（明帝紀にある伊・洛・河・漢水の洪水などによる）飢饉の影響もある<sup>20)</sup>とされている。また、『晉書』安平獻王孚傳には

每諸葛亮入寇關中，邊兵不能制敵，中軍奔赴，輒不及事機，宜預選步騎二萬，以爲二部，爲討賊之備。又以關中連遭寇，穀帛不足，遣冀州農丁五

屯於上邦，秋冬習戰陣，春夏修田桑。由是關中軍國有餘，待賊有備矣。後除尚書右僕射，進爵昌平亭侯，遷尚書令。

とあるが、波線部が「宣帝紀」・『晉書』食貨志と、下線部が『晉書』食貨志と共通していることから、司馬孚の動きは少なくとも諸葛亮の北伐期以降のことであり、実際にはこの太和5年頃のことと思われる。

ここまでの冀州の農夫を上邦に入植させ、京兆・天水・南安での塩池開発を行ったことについては、全て『晉書』に記載されており、『三國志』及び裴注には記述がなく、史料批判が難しいことから、ひとまず受け入れておくこととする。

## 5：「浮華」への弾圧と司馬氏の生存戦略（太和6年頃）

「宣帝紀」には記述がないが、太和6年には司徒・董昭の上表があり、いわゆる「浮華」の人々が表立って取り上げられることとなった<sup>21)</sup>。

明帝期の浮華に関する問題については、統治階層が分断したことで起こった政治闘争であり、九品中正制における評価との関連をより重視する見解<sup>22)</sup>や儒学を学び礼法を重視するとともに「口吃小言」<sup>23)</sup>であった明帝が清談に通じた同世代の浮華とされた人々への嫌悪していたという「個性」<sup>24)</sup>に加えて、男子を相次いで亡くしていた明帝<sup>25)</sup>とまだ存命であった曹植との政治闘争が「事功派」と「浮華派」の対立に関係するとする見解<sup>26)</sup>などがある。

また、「浮華」に関する問題が表面化した時期として、先述の明帝の詔勅が出た太和4年<sup>27)</sup>、董昭の上表があった太和6年<sup>28)</sup>、そして『魏志』盧毓傳に

青龍二年，入爲侍中…在職三年，多所駁争……前此諸葛誕、鄧颺等馳名譽，有四（窗）（聰）之諂，帝疾之。時舉中書郎，詔曰：「得其人與否，在盧生耳。選舉莫取有名，名如畫地作餅，不可啖也。」

とあることから、青龍年間だとする見解がある<sup>29)</sup>が、ここではひとまず明帝期の「浮華」に関する問題が突然起こったわけではないことを確認しておくこととしたい。

ただ、『魏志』曹爽傳裴注所引『魏略』には

李勝字公昭。……明帝禁浮華，而人白勝堂有四窗八達，各有主名。用是被收，以其所連引者多，故得原，禁錮數歲。

とあり、これによれば、李勝などの「浮華」の人々に関わったものが多いために李勝が許されたとある。

「浮華」とされた人々は当時洛陽にいた20代から30代の比較的若い世代<sup>30)</sup>で、夏侯玄（夏侯尚の子、曹操の「孫」）や司馬師、荀粲（荀彧の子）、孫密（孫資の子）、劉熙（劉放の子）、衛烈（衛臻の子）、裴徽（裴茂の子、裴潜の弟）、劉陶（劉曄の子）、そして何晏（何進の孫、曹操の養子・婿）などの（場合によっては宗室にもつながる）高官や明帝の側近の子弟が多く、その外にも諸葛誕、鄧颺、丁謐（丁斐の子）、畢軌、李勝（李休の子）、李豊（李義の子）、そして傅嘏（傅充の子）といった官僚もその中に数えられるなど、確かに関わった官僚たちの層は幅広いと思われる<sup>31)</sup>。

これ自体は当時の政治情勢に短期的かつ直接の重大な影響はほぼなかったと思われるが、明帝と同世代及び少し下の世代の人材が明帝から睨まれ、一旦は排除され、重任を任せる新世代の人材の減少を招いた<sup>32)</sup>ことは、この後の司馬懿の政治的地位の相対的上昇につながった可能性があると思われる。

また、「浮華」と思われる人物の中に、司馬懿の長子の司馬師がいることにも注意が必要である<sup>33)</sup>。そもそも司馬師の妻として、曹操の「娘」（曹眞の姉妹（曹爽の従姉妹））を妻としていた夏侯尚の娘<sup>34)</sup>、そして夏侯玄の妹である夏侯徽を迎えており、司馬懿とその一族が曹魏宗室（及び曹魏において重要な地位を占める夏侯氏）と血縁関係を持つとしていたことを意味していると思われるであろう。その中で、司馬懿本人は儒学を重視する立場であったと見られるが、そもそもの動機は何であれ<sup>35)</sup>、夏侯玄を通して司馬師を名族の次世代の人々が多い「浮華」とされた人々と通じさせておくことは（その思惑は明帝により「浮華」の徒が不興を買い、免官となった者もいることで裏目に出た部分もあっただろうが）、当時の司馬師、そして司馬懿にとっても司馬氏一族の生き残り策の一つとしてむしろ必要なことであったと思われる。

このような政治情勢の中で、『晉書』景懷夏侯皇后傳によれば、青龍2年に

司馬懿は司馬師の妻である夏侯徽を鳩殺したとされ、その理由としては、明帝期に司馬懿が曹魏の政治・軍事で重きを占め、その子たちも雄才大略がある上に、夏侯徽は司馬懿が魏の純臣ではないと知っていたので、司馬懿が嫌っていたことが挙げられている。

そのような中で、この「鳩殺」が史実だとした場合、その背景については、司馬懿は司馬氏一族の生存戦略の一環として、夏侯徽を鳩殺することで、明帝から睨まれた「浮華」の徒と司馬氏との関係を断ち切ろうとしたものと考えられる。

ただ、司馬懿が明帝即位直後に出鎮させられるなどして警戒されていた中で、そもそも司馬師と夏侯徽の婚姻自体が司馬氏と曹魏宗室や夏侯氏との関係強化の意図を示していた上に、「曹眞残碑」が青龍3年(235年)以降に頌徳を目的として曹爽や司馬懿らによって立てられたことから、曹爽の従姉妹である夏侯徽が亡くなった後でも、司馬懿は皇帝権力や曹爽と密接に結びつく姿勢を見せ、少なくとも「魏の純臣」である姿勢を見せようとしていた<sup>36)</sup>ことを踏まえると、そもそも夏侯徽の死の原因が本当に「魏の純臣ではないと知られてしまった司馬懿による鳩殺」であったかどうか疑問である。加えて、司馬師と夏侯徽の間に5人の娘が生まれていて、この二人の仲に問題があったとする史料がないことも考慮する必要があるだろう。また、夏侯徽の死と明帝による「浮華」の徒の排斥の関係を考えたとしても、その排斥から時期が経っているこの時期に鳩殺される理由としては考えにくいだろう。

司馬師はその後、呉質の娘を娶るが、呉質が単家であったことから離縁し、次いで羊衝の娘、すなわち羊祜の姉を娶ったとされ、これらの婚姻関係の変化については、司馬懿がスタンスを「貴戚」から「名族」に移してゆくことの反映との指摘もある。

先述のように、呉質は曹丕の「太子四友」として文帝(曹丕)や司馬懿との関係が深く、太和4年に亡くなる直前に司馬懿を称賛するなど関係は良好で、さらに明帝との関係も良好だったと思われる<sup>37)</sup>ことから、その娘と司馬師を結婚させたと推測できる。渡邊義浩氏は「皇帝との対峙性を陳羣に擔わせなが

ら、司馬懿はその陰で着々と勢力を拡大し<sup>38)</sup>たとしているが、上記の推測が成り立つのであれば、曹魏宗室（やその周辺）との関係強化を図ったと考えられる夏侯徽との婚姻関係と目指す方向性は変わらず、明帝と対峙しようとはしていなかったのではないかと考えられる。

しかし、呉質はもともとの地位が低く<sup>39)</sup>、さらにその娘と司馬師が結婚したと思われる時点で既に没していたことに加えて、司馬氏の政治的地位を安定させることを視野に入れた場合、準宗室と考えられる夏侯氏と婚姻関係を有しながらも曹魏政権中枢に近すぎない「代吏二千石」<sup>40)</sup>であった地方の名門であり、浮華を否定する明帝の儒教重視の方針にも違背しないという絶妙な存在であった羊氏との関係を深めることを優先したことも司馬師と羊氏との婚姻に至った理由の一つであろう。

このような司馬師をはじめとする司馬氏の婚姻関係が勢力拡大の手段の一つであったことは間違いのないであろう<sup>41)</sup>。しかし、これまでの司馬懿の（慎重に見える）政治的処世のあり方や太和年間から夏侯徽が亡くなった青龍2年前後の司馬懿の政治的な立場からすれば、司馬氏の婚姻策は「勢力拡大戦略」というよりは「一族の生き残り戦略」と見た方が正確ではないと思われる。

## おわりに

太和2年から6年にかけての「宣帝紀」における司馬懿に関する記述を『三國志』及び裴注と比較検討してみると、「宣帝紀」の記述にはあって他の史書には記載がない場合や逆に『三國志』及び裴注所引史籍にあるが「宣帝紀」にない場合があるため、特に「宣帝紀」の史料批判が難しいことが多いが、『漢晉春秋』や王沈『魏書』が典拠の一つであると思われる箇所も存在する。また、「宣帝紀」には王朝の初代皇帝の扱いを受ける司馬懿に憚って敗北を糊塗するような内容ととれる内容も存在するので、注意が必要である。さらに、太和年間の「浮華」派や夏侯玄と司馬師の関係、さらには司馬師の婚姻関係を確認すると、司馬懿とその一族が勢力拡大のためというよりは生き残りのために太和年間から青龍年間でも曹魏宗室や名族との関係との関係を深めていること

がわかる。

また、孟達との戦い以降、曹休主導の孫呉遠征、曹眞主導の蜀漢遠征への参加に加えて、諸葛亮と戦い、曲がりなりにも撤退させる結果を出す中で、司馬懿が司令官としての実績を急速に積み重ねてきた経緯を踏まえると、司馬懿の政治的地位の相対的上昇は、本来政権の柱を担うはずだった曹休・曹眞の相次ぐ逝去、(陳羣とは異なり、)明帝に出鎮させられた中で荊州や雍州での軍事の実績を積み重ねてきたこと、さらには「浮華」の徒の排除による次世代の人材不足によるものであったと思われる<sup>42)</sup>。

今後は、司馬懿が諸葛亮との五丈原の戦いから公孫淵との戦いを経て、曹魏の重鎮となって政権を担っていく過程を考察していきたいと考えている。

#### 注

- 1) 宋傑〔著〕『三国兵争要地与攻守戦略研究』(以下、「宋傑前掲書」と略す)(中華書局、2019年)(上册)曹魏篇第四章・曹魏西晋征呉路線の演変・231頁～234頁では「司馬懿“声東擊西”的征呉策划」、朱子彦『司馬懿傳』(以下、「朱子彦前掲書」と略す)(人民出版社、2020年)では第8章・制定伐呉新戦略と題してこの経緯が取り上げられている。
- 2) この戦いに関して、本文や前注に引用した史料以外の『三國志』及び裴注での記述としては、曹魏側は『魏志』明帝紀・曹休傳にもあるが、詳細は『魏志』賈逵傳に記載されている。また、孫呉側は『三國志』呉書〔以下、「『呉志』』と略す〕呉主傳・周魴傳・陸遜傳・朱桓傳に記載がある。ちなみに、石亭での曹魏の敗北を受けて、同年12月からの諸葛亮の第二次北伐(陳倉攻撃)が行われたものと思われる。
- 3) 宋傑前掲書(上册)曹魏篇第四章・曹魏西晋征呉路線の演変・「司馬懿“声東擊西”的征呉策划」232頁～233頁では、黄初3年(222年)の曹休・曹仁、曹眞・夏侯尚、そして曹丕自身の親征という異姓の大臣に主将を担当させない三方面からの呉への出撃と同様に、宗室優先の政策故に、揚州都督管轄の出撃になったと指摘している。朱子彦前掲書242頁では、司馬懿に責任が及ばなかった理由として、司馬懿主導の作戦ではなかったこと、詔勅により軍を留めて情勢視察をしていたことを挙げている。
- 4) 宋傑前掲書(上册)曹魏篇第四章・曹魏西晋征呉路線的演変・「司馬懿“声東擊西”的征呉策划」233頁～234頁では、司馬懿の作戦が取り上げられなかった理由として、曹魏軍が陸戦に長があり、この時の水軍は弱く、勝算がないと考えたこと、漢水から長江に入る地域の自然環境が水郷地域であり、複雑であったため、



補給を得にくく、理想的な主力の攻撃通路ではなかったこと、漢水から長江に入る沔口付近の自然条件が主力軍の展開と活動に不利であったことの三点を挙げている。また、朱子彦前掲書第8章では「破壊司馬懿戦略規劃的の石亭之戦」と題する節で石亭の戦いについて述べられている。

- 5) 拙稿「『三國志』撰述における西方非漢族関係の記載に関する一考察」〔以下、「拙稿1」と略す〕(『東洋学術研究』58-2、2019年)など参照。
- 6) 浮華については数多くの研究があるが、ここでは福島吉彦「何晏研究一弁褒貶」(『山口大学文学会誌』23、1972年)、好並隆司「魏・晋代、司馬・曹両氏の浮華・老荘思想をめぐる政争」(『史学論叢』39、2009年)・「『浮華』論考」(『史学研究』266、2009年、以上2つの論考は好並隆司『後漢魏晋史論攷一好並隆司遺稿集』(溪水社 2014年)所収)、王暁毅「論曹魏太和“浮華案”」〔以下、「王暁毅前掲論文」と略す〕(『史学月刊』1996年第2期)、李宜春「略論曹魏政治中的“浮華”問題」(『聊城師範学院学報』(哲学社会科学版)1999年第1期)、孔毅「論曹魏の黜抑“浮華”」〔以下、「孔毅前掲論文」と略す〕(『許昌師專学報』2000年第1期)、趙昆生「浮華交会与曹魏政治」〔以下、「趙昆生前掲論文」と略す〕(『重慶師範大学学報』(哲学社会科学版)2005年第2期)、劉蓉「漢魏名士中の事功派与浮華派」〔以下、「劉蓉前掲論文1」と略す〕(『東岳論叢』30-7、2009年)・「析明帝禁浮華」〔以下、「劉蓉前掲論文2」と略す〕(『北京師範大学学報』2004年第5期、これらはのちに『漢魏名士研究』(中華書局、2009年)所収。本論考では『漢魏名士研究』に依拠することとする)、李鵬「曹魏時期“浮華交会”現象辨析」〔以下、「李鵬前掲論文」と略す〕(『濮陽職業技術学院学報』30-1、2017年)を挙げておくこととする。
- 7) 『魏志』明帝紀には  
太和……四年春二月壬午，詔曰：「世之質文，隨教而變。兵亂以來，經學廢絶，後生進趣，不由典謨。豈訓導未洽，將進用者不以德顯乎？其郎史學通一經、才任牧民，博士課試，擢其高第者，亟用；其浮華不務道本者，皆罷退之。」とある。
- 8) 『蜀志』魏延傳裴注所引『魏略』によると魏延の計画では子午道を通ろうとしたが、諸葛亮は危険だとしたとされる。拙著『三國志 正史と小説の狭間』〔以下、「拙著1」と略す〕(白帝社、2006年初版・2009年第2版、2017年電子書籍版〔バンダ・パブリッシング株式会社〕)第六章・「丞相」・諸葛亮の時代」、拙稿1など参照。
- 9) 『魏志』華歆傳・王朗傳附王肅傳参照。
- 10) 呉士鑑・劉乘幹〔注〕『晉書斟注』(藝文印書館、1936年)巻一や渡邊義浩・高橋康浩〔編〕『晉書校補』(大東文化大学東洋研究所、2013年)でも指摘されている。
- 11) 『蜀志』王平傳には  
王平字子均，巴西宕渠人也。本養外家何氏，後復姓王。

- とあることから、何平が王平である可能性がある。
- 12) この戦いに関して、本文や前注に引用した史料以外の『三國志』及び裴注での記述としては、曹魏側は『魏志』明帝紀・張郃傳に、蜀漢側は『蜀志』後主傳・諸葛亮傳・李嚴傳に記載がある。
- 13) また、林國贊『三國志裴注述』卷二には  
此文非也。是役李平譎稱糧盡，召亮還。懿強遣張郃追之，郃遂被殺。又據武侯傳注引漢晉春秋……武侯前後兩破魏軍，魏既失一大將，復盡喪軍資，上邽麥亦適爲蜀有。魏書云云，其虛妄更不待辯。但魏書自宜爲魏諱，陳志亦云爾者，其事涉司馬懿也。  
とあり、『魏書』の記述が誤りで、上邽の麥が蜀漢のものとなっていることも指摘している。
- 14) 現行『晉書』の基盤になったと思われるいわゆる「十八家晉書」については、湯球〔輯〕『九家舊晉書輯本』（高峰出版社、1992年）や湯球・黃爽〔輯〕喬治忠〔校注〕『衆家編年体晋史』（天津古籍出版社、1989年）などを参照。
- 15) 拙著1参照。
- 16) 王鳴盛『十七史商榷』卷四十四・曲筆未刪では  
……此紀特晉人夸詞，在當日爲國史，固應爾爾；今晉書成於唐人，而猶仍其曲筆，不如刪改，何也？  
とあり、『晉書』の曲筆とされている。宋傑前掲書（上册）曹魏篇第七章・曹魏的祁山与隴右戰局之演變・362頁や同書（下册）蜀漢篇第三章・蜀漢北伐路線与兵力部署之變更・634頁、朱子彦前掲書第9章・双雄斗智の歴史活劇・鹵城之戰・271～280頁でも「宣帝紀」と『漢晉春秋』の記述の違いが指摘され、『晉書』は司馬懿が敗れたことを記録するのを憚ったと考えられることから、史家が『漢晉春秋』に準じてきたと述べている。
- 17) 田中靖彦「『漢晉春秋』に見る三国正統観の展開」（『東方學』110、2005年）など参照。
- 18) 林國贊『三國志裴注述』卷二にも  
……習鑿齒以晉人撰漢晉春秋，略不爲司馬懿回護，誠所謂公道在人者，其說當可信。如晉書說，則與習氏書正相反。且陳志猶載射殺張郃事，彼則並一字不及。  
とある。
- 19) 嘉平4年では司馬懿が亡くなっており、『晉書』五行志には  
太和四年八月大霖雨，歲以凶饑。  
とあることから、「太和」の誤りと考えられる。
- 20) 佐久間吉也「曹魏時代の灌溉について」（『福島大学学芸学部論集』12-1、1961年、『魏晉南北朝水利史研究』第一書房、1980年）など参照。
- 21) 『魏志』盧毓傳・諸葛誕傳・曹爽傳裴注所引『魏略』など参照。

- 22) 趙昆生前掲論文、李鵬前掲論文など参照。
- 23) 『魏志』明帝紀参照。
- 24) 明帝の個性については、福原啓郎「曹魏の明帝―奢靡の皇帝の実像」(『古代文化』52-8、2000年、のち『魏晉政治社会史研究』(京都大学学術出版会、2012年)所収)でも  
……天下は天子である朕自身のものという意識が強く、独断専行のきらいがあり、とりわけ浮華の朋党には我慢がならず、夏侯玄らを排斥した。  
と記されている。
- 25) 『魏志』明帝紀によると、黄初7年(226年)に清河王曹冏、太和3年に繁陽王曹穆、太和6年に曹殷を相次いで亡くしている。
- 26) 劉蓉前掲論文1・2参照。明帝紀裴注所引『魏略』にあるように、諸葛亮の第一次北伐の際に長安に行幸した太和2年に、「讒言」によるものとはいえ、群臣が曹植を擁立しようとする可能性があったことも頭に入れておく必要があるだろう。
- 27) 司馬光『資治通鑑』卷七十一・魏紀三・明帝太和四年、郭熹微「論魏晉禪代」(『新史學』第8卷4期、1997年)など参照。
- 28) 唐長孺『魏晉南北朝史論叢』(生活・読書・新知三聯出版社、1955年)・九品中正制度試釋、周一良『魏晉南北朝史札記』(中華書局、1985年)《三國志》札記・「曹氏司馬氏之斗争」、王曉毅前掲論文、劉蓉前掲論文1・2など参照。
- 29) 柳春新「“青龍浮華案”析論」(『漢末晉初之際政治研究』岳麓書社、2006年)参照。
- 30) 孔毅前掲論文など参照。
- 31) 『魏志』諸葛誕傳裴注所引『世語』には  
是時、當世俊士散騎常侍夏侯玄、尚書諸葛誕、鄧颺之徒、共相題表、以玄、疇四人爲四聰、誕、備八人爲八達、中書監劉放子熙、孫資子密、吏部尚書衛臻子烈三人、咸不及比、以父居勢位、容之爲三豫、凡十五人。帝以構長浮華、皆免官廢錮。  
とある。王曉毅前掲論文なども参照。
- 32) 孔毅前掲論文など参照。
- 33) 『晉書』景帝紀には  
景皇帝諱師、字子元、宣帝長子也。……少流美譽、與夏侯玄、何晏齊名。晏常稱曰：「惟幾也能成天下之務、司馬子元是也。」  
とあることなどから、「浮華」の一人であった可能性がある。
- 34) 『晉書』景懷夏侯皇后傳には  
父尚、魏征南大將軍；母曹氏、魏德陽鄉主。  
とあり、『魏志』夏侯玄傳には  
玄、爽之姑子也。

とある。

- 35) 福原啓郎『西晉の武帝 司馬炎』（白帝社、1995年）第三章・司馬師と司馬昭・91頁では「この頃の司馬師は、啓蒙思想にかぶれた若き日のプロイセン王国のフリードリヒ2世を髣髴とさせる」と述べている。
- 36) 津田資久「曹眞残碑」考釈（『国士館東洋史学』1、2006年）参照。
- 37) 『魏志』王粲傳附呉質傳及び同傳裴注所引『魏略』参照。
- 38) 渡邊義浩「司馬氏の臺頭と西晉の建國」（『大東文化大学漢学会誌』46、2007年、のち渡邊義浩『西晉「儒教國家」と貴族制』（汲古書院、2010年）所収）など参照。
- 39) 『魏志』王粲傳裴注参照。
- 40) 『晉書』羊祜傳参照。
- 41) 渡邊義浩「西晉司馬氏婚姻考」（『東洋研究』161、2006年、のち渡邊義浩『西晉「儒教國家」と貴族制』（汲古書院、2010年）所収）など参照。
- 42) 林榕烈「魏明帝与司馬懿關係考論—兼及魏明帝朝的政治」（『電子科技大学報』（社会科学版）16-2、2014年）100頁では、曹眞が亡くなった時点では、曹氏、夏侯氏の重臣が逝去した上に、新世代にも重任を任せることができなかつたと指摘されている。拙稿1でも、曹休没後の曹眞の大司馬昇格は「年功序列」と太和元年～2年の諸葛亮の北伐を防御した功績などを踏まえた論功行賞によるものと述べている。